

【 3 】

氏 名	竹 田 聰 州 たけ だ ちよう しゅう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 65 号
学位授与の日付	昭 和 46 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	常民仏教と祖先信仰

(主 査)
論文調査委員 教授 赤松俊秀 教授 岸 俊男 教授 武内義範

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、序章「研究の視角と方法」、前編「寺伝から見た民間〈浄土宗〉寺院の一般的成立」、後編「村における墓と寺との史的成立関係」より成っている。前編はさらに27章、後編は17章に小別されるほか、結章として「民間寺院成立の意義と基本類型—持庵と惣堂—」の一章が附せられ、付表・付図・付注・付論が別巻として添付されている。

序章は、著者の立場を明らかにしたものであるが、第3節「常民の概念と史上の時代」がその中核をなしている。常民は日本民俗学が設定した学術用語であって、階級を示す概念ではなく、庶民とは同意語ではない。一般の歴史学が研究対象とする事実は非常を契機とするものが多いのに対して、民俗学は恒常性・凡常性をもって特色づけられる民間伝承を独自の研究対象とする。常民はその意味で民俗学の研究対象となるものである。

著者は前記の視角に立って、元禄時代に浄土宗全国寺院が録進した各寺の由緒書を素材として、「寺院開創檀越」「開山僧の生態」「非宗旨的諸契機」に大別して、前編主題の民間寺院の一般的成立の傾向を具体的に明らかにする。素材の由緒書の大半は、「蓮門精舎旧詞」の名のもとに既に公刊されており、所収寺院6008寺のうち現存するもの4417寺。ほかに未刊の分307寺を加えると、6315寺の由緒を明らかにすることができる。著者は、その一々の寺院について、その由緒を前記の要項に従って分析した結果、次の事実を確認した。

(1) 民間寺院は、それに先きだつものがなく全く新しく寺院が開創された以外に、既存の堂庵・廃寺などを受け継ぎ、それを拠点として、旧跡の復興・再生という形で成立したことが多いこと（第2章寺伝における寺院の開創と中興）、(2) 近世・近代に存続した寺院の大半は、戦国時代末から江戸時代初頭の1世紀半に成立し、ことにその後半の天正～寛永のやく70年間に集中的に見られること（第3章寺院開創事例の地域分布と年代分布）、(3) 寺院開創動機は、開創檀越の身分その他によらず有縁のための広義の菩提寺とすることであった場合が最も多いこと（第6～8章寺院開創動機、第9～10章寺院の成立年代）、(4) これ

ら民間寺院開山僧の多くは浄土宗正規の僧であるが、非正規の僧を開山とする寺院も少なくないこと（第11章開山としての非正規僧）、(5) 非正規僧の開山寺院では開創檀越が明らかでないことが多く惣村が開創した所伝を持つものが多数を占めること（第12章寺院の前身としての堂庵の創興）、(6) 中世の民間布教に大きな足跡を印した回国遊行・苦修練行の聖が一处に止住して開山となった事例が中世末期に東国・西国の双方にわたって見られること（第14章ヒジリの生態とその脱化・定住）、(7) 中世の民間寺院は宗旨が固定しないことが多かったが、寺院が宗旨的に固定するのは、近世法度体制以前における寺院の局地的・自然発生的本末関係と密接に関連すると認められること（第19章前代異宗性の後代的遺係）、(8) 民間寺院の成立は既存の非宗旨的・前仏教的民俗信仰の媒介によって地縁社会に具体化し、その媒介要素は後世まで長らく保存されたこと（第20章神仏習合）、(9) 墓碑としての石碑建立が一般化する以前は、寺自体が詣墓の一般的形態であったこと（第23章墓と寺との癒着）、(10) 元禄当時、寺内紀年石碑の古い事例は中世末期をさかのぼらないこと（第26章墓と寺との癒着）。

進門精舍旧詞の記事分析によって確認された上記事実をもとに、著者は後編において村における墓と寺との史的成立関係を、奈良県山辺郡都介野村大字来迎寺、同村大字吐山、京都府北桑田郡山国村大字中辻に現在見られる事実に基づいて丹念に究明する。結章は前後両編の総括に当たり、侍など村内有力な個人の外護によって開創された寺院は多く氏寺・持庵の形を持つものに対して、庶民など多数の合力によるものは村惣堂であるものが多いことを明らかにする。

論文審査の結果の要旨

日本民俗信仰の主要な特質を構成する祖先信仰の実態を究明することは、民俗学の重要な研究課題の一つとなっている。しかしその究明が容易でないのは、現在見られる祖先信仰が超宗派的に仏教信仰に癒着しているためであって、祖先信仰としても仏教信仰としても他に比類を見ない複雑な内容を持っているからである。従来の通説では、両者の癒着は江戸幕府が強行した宗教政策の所産と解する傾向が強いが、著者は両者の癒着が現在でも存続することから通説に疑問を持ち、江戸幕府の当時、幕府と親しい関係にあった浄土宗の寺院6千有余寺について、開創の檀越・僧侶・由緒等を克明に究明し、両者の癒着は、江戸幕府の成立と直接に関係がなく、中世後期から近世初頭にかけて徐々に進展した事実を明確にした。従来も墓制の変遷、集落の発展過程をよりどころとする研究は見られたが、挙証が普遍的でなかったり民俗事象に対する理解が十分でなかったりしたために、その所論は明確を欠くことが多かった。著者は、由緒書などの文献資料に対して、民間伝承を分析すると基本的に同一の方法を導入して、上記の事実を明確にしたことは、その功績として長く銘記せらるべきものと信ずる。ただ惜まれるのは、あまりにも多くの事例を解明したために、類型分別が過多になった傾向があり、事態発展の理解がそのためにやや困難になっていることである。今後の精進によってその難点を除去することを期待したい。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。